

左鎮、八仙洞と大坵坑

山崎 真治*

Paleolithic and Early Neolithic sites in Taiwan

Shinji YAMASAKI*

1. はじめに

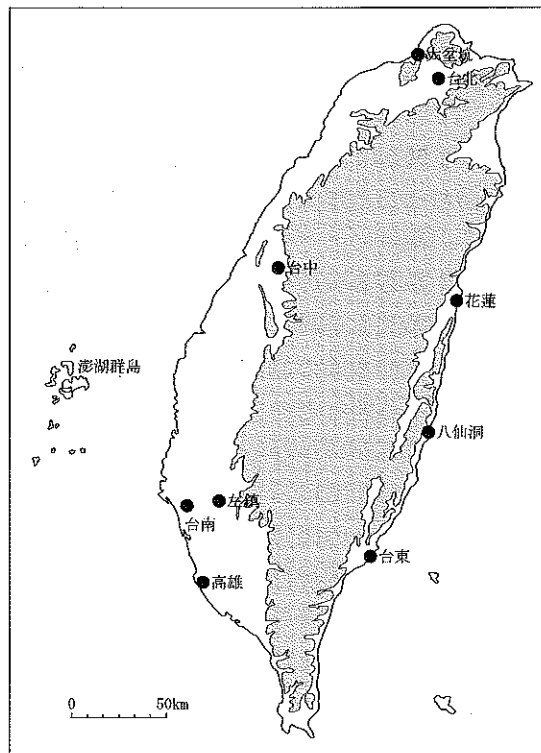
筆者は2009年9月、郭素秋氏(中央研究院歴史語言研究所)のはからいを得て、台湾各地の先史遺跡を訪問する機会を得た。短期間の忙しい日程ではあったが、左鎮、八仙洞、卑南、大坵坑など、著名な重要遺跡を見聞できたことは、大変有意義で感慨深いものであった。今回の台湾行で終始お世話になった郭氏、ならびに漢語に疎い筆者に同行いただき、各地を案内して下さった呉美珍氏に、篤く御礼申し上げる。また、財団法人樹谷文化基金会考古中心の潘常武氏、朱正宜氏、劉鵠雄氏には、南科の諸遺跡出土品を拝見させていただき、左鎮化石出土地をご案内いただいた。諸氏のご厚情に深く感謝の意を表したい。

本稿では、筆者が訪問しえた遺跡のうち、左鎮、八仙洞、大坵坑の各遺跡について紹介することにした。

2. 台南県左鎮郷菜寮溪

台南県南部の新化丘陵地区内に位置する左鎮郷菜寮溪流域には、泥岩と砂岩の互層からなる更新世の崎頂層が分布し、多数の脊椎動物化石産地が知られている。左鎮人として知られる更新世人類化石は、この菜寮溪流域で発見された。「Discovery of Fossil Homo sapiens from Cho chen in Taiwan」(SHIKAMA T. et al., 1976) や「考古学より見た台湾」(宋 1980) によれば、1972年11月、郭徳鈴氏収集の菜寮溪化石標本中より人類の右頭骨片が見出され、1974年1月には、潘常武氏が同じ地点で採

集した人類の左頭頂骨が見出された。これらの人類化石は、ともに臭屈の100mほど西で採集されたもので、崎頂層産の化石とは色調や水磨の度合いなどが異なっており、崎頂層上位の台南層(完新世中期)の底礫層に由来するものと考えられている。解剖学的観察によれば、これらの頭骨は現生人類のものとされ、フッ素含量が0.76%、マンガン含量が0.25%であることから2~3万年前のものと考えられている(SHIKAMA, T. et al. 前掲)。



第1図 台湾地図

* 沖縄県立博物館・美術館 〒900-0006 那覇市おもろまち3-1-1

* Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, Omoromachi 3-1-1, Naha-shi, Okinawa, 900-0006 Japan.

菜寮河流域の崎頂層からはこれまでに多数の化石が採集されている。崎頂層は、浅い海あるいは内湾の堆積物と考えられており、「台南県境内新化丘陵区之化石地質景観及基礎地質調査」(鍾 1998)によれば、崎頂層は下方から上方に向かって、岡林段(Ku1)、虎脚口段(Ku2)、滴水子段(Ku3)、過嶺段(Ku4)、三重溪段(Ku5)、牛食水段(Ku6)に区分される。牛食水段は砂岩を主とし、中間に砂岩と泥岩の互層が挟在する。貝類化石のほか、ゾウ、シカ等の大型化石も含まれる。三重溪段は泥岩からなり、貝類化石を豊富に産する。三重溪段からは、かつて保存の良い犀牛の化石が発見されている。過嶺段は5~10cm程度の砂岩と泥岩の互層からなり、貝類の化石を散漫に含むが、中間には約15mのもろい砂岩が挟在し、脊椎動物化石が発見される。滴水子段は泥岩からなり、中部には10m余りの泥岩と砂岩の薄い互層が挟在し、貝類化石あるいはその破片がわずかに含まれる。虎脚口段は砂岩からなり、中間に厚さ約10mの砂岩と泥岩の互層が挟在し、この泥岩部分の上部には貝類化石の密集部がある。岡林段は崎頂層最下部の地層で、下部は砂岩と泥岩の互層、上部は泥岩で、中部に貝類化石密集部が挟在する。

筆者は、左鎮人の発見者である潘常武氏の案内で、菜寮溪を訪れることができた。菜寮溪周辺の地層は浸食に弱く、風雨によって容易に崩壊し、洗い出された堆積土中から多数の化石が採集されるとのことであった。左鎮人もそのような状態で発見されたもので、人骨化石の本来の包含層は未確認であり、左鎮人に関連する石器などの文化遺物も未発見とのことである。左鎮人がいかなる文化の荷担者であったのかという点については、今日なお議論があり、長濱文化や網形文化との関連が考えられている。

菜寮溪の化石産地近傍には、現在菜寮溪化石館が開設されており、ハヤサカサイとして知られる犀牛の骨格レプリカをはじめ、菜寮溪、澎湖海峡など台湾各地で採集された貝類、脊椎動物化石が展示されている。菜寮溪採集の脊椎動物化石には、ゾウ、サイ、シカ、ネコ科(ヒョウあるいはトラ)、ワニ、サメ、カメ、クジラ、イノシシなどが見られ、大型獣がシカ類、イノシシに限られる沖縄の更新世動物相とは異なり、大陸的な様相を示すようである。

3. 台東県長濱郷八仙洞

八仙洞は、台東県長濱郡に位置する海蝕洞穴群である。筆者が遺跡を訪れる直前の2009年夏の台風で台東県は甚大な被害を受け、筆者も台南から台東に向かう道中、至る所で大規模な土砂崩れ、土石流の痕を目にしたが、八仙洞でも台風災害後の修復作業中の箇所が多く見受けられた。

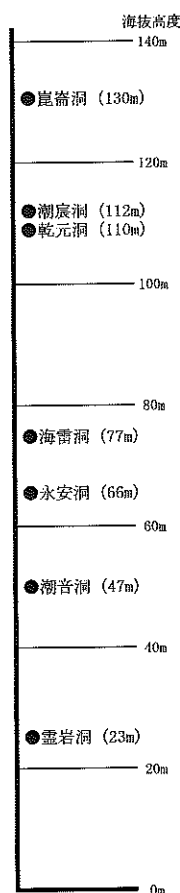
「考古学より見た台湾」(宋 1980)によれば、八仙洞遺跡は台湾大学考古隊によって1968年から4期5次にわたって発掘調査が行われた。その結果、潮音洞、海雷洞、乾元洞、崑崙洞の各洞穴から、豊富な先土器文化に属する資料が発見され、長濱文化と名付けられた。長濱文化の石器には磨製石器はなく、打製石器のみがある。その多くは小形石器で、大型石器は比較的少ない。小形石器には石英岩、玉髓など緻密な白色系統あるいはその他の色調の石材が利用され、ごく少数フリント(燧石)、鉄石英などが見られる。スクレイパー、錐などが見られるが、不定形であることが最も主要な特徴である。大形石器には硬質砂岩、カンラン岩、安山岩、輝長岩など灰色系統でやや脆い石材が用いられる。二次加工のない剥片が圧倒的多数を占め、二次加工のあるものは稀である。八仙洞では、以上のような剥片石器、礫石器群とともに、単式釣針やヤス先などの骨器、多数の魚骨(イソマグロ、ハリセンボン、ミナミクロダイ)が発見されているという(加藤 1996a)。八仙洞の年代については、八仙洞洞穴群のうちより低い位置にあり、最も年代的に新しいと考えられる潮音洞の上部先土器文化層から得られた4点の放射性炭素年代値(NTU-69 5240±260BP、NTU-70 5340±260BP、NTU-71 4970±250BP、Y-2638 4870±300BP)が知られている(宋 1980)。また、潮音洞よりも上位にある乾元洞の先土器文化層中から得られた木炭を試料として年代測定を実施したところ、その結果は15000BPよりも古い(NTU-135 >15000BP)というものであった(宋 前掲)。

長濱文化の石器群については、加藤晋平氏による詳細な紹介がある(加藤1996a, b)。加藤氏によれば、八仙洞類似の石器群は、成功小馬海蝕洞、墾丁龍坑、鵝鑾鼻第2などの洞穴、岩陰遺跡でも発見されており、単式釣針や貝類、魚骨、獣骨を伴う。これらの遺跡の年代について、成功小馬では5770±50、

5730±50BP、墾丁龍坑では5560±90BP、鵝鑾鼻第2では4820±100BPの年代値が得られていると言う(加藤 1996a)。最近調査された台東県成功鎮の小馬龍洞遺跡は、小馬海蝕洞遺跡や潮音洞とほぼ同程度の海拔約50mに位置しており、ここでも八仙洞と同様な石器群が出土している(陳 2004)。

長濱文化の遺跡分布は、現在のところ台東県や屏東県など、台湾東部、南部に偏っているが、台北市芝山岩遺跡収集資料中には長濱文化近似の礫器が見られ、台湾西海岸にも類似の文化が広がっていた可能性が指摘されている(宋 1980)。

なお、八仙洞の年代について、2009年7月23日付けの中央通訊社(Central News Agency)配信の報道によれば、2008年から中央研究院と台湾大学によって行われている八仙洞の発掘調査においていくつもの炉址が発見され、放射性炭素年代測定の結果、その年代は2万年前に遡ることが明らかになったという。詳細な報告が待たれる。



第2図 八仙洞洞穴群

八仙洞の現地は現在、宗教的聖地となっており、各洞穴は宗教施設として整備され、発掘当時の様子を見ることがほとんど不可能であったが、かろうじて傍らに設置された掲示板から遺跡であることがうかがえるという状況であった。八仙洞の海蝕洞穴群は、巨大な岩壁の各所に高度差をもって分布しており、その年代は下位の洞穴ほど新しく、上位の洞穴ほど古いという(第2図)。これがわずかに数万年という時間幅で形成されたということであるから、驚きである。日本ではまず見ることはできない、壮大な地史をうかがわせる遺跡であった。

4. 台北県八里郷大空坑遺跡

大空坑遺跡は、淡水河口に近い丘陵の緩斜面に位置する、新石器文化早期の大空坑文化の基準遺跡である。「大空坑遺址考古文化的内涵」(郭 2009)によれば、大空坑遺跡からは新石器時代に属する大空坑文化(6000-4100年前)、訊塘埔文化(4500-3500年前)、円山文化(3300-2300年前)、植物園文化(2200-1800年前)、鉄器時代に属する十三行文化(1800-400年前)および近代の包含層や遺物が検出されている。郭素秋氏は、大空坑遺跡の大空坑文化の様相について、次のように述べている。

「大空坑文化の文化遺存は、台北県八里郷の大空坑遺跡下層においてはじめて認識されたもので、このため大空坑遺跡下層を基準として、台湾新石器時代早期の文化を『大空坑文化』と呼ぶ。

大空坑遺跡の大空坑文化層は、主に遺跡の北側と東側に分布し、東側でも南に寄った湧水点に多い。これまでの発掘の所見によれば、大空坑文化層の厚さは約10-20cmで、上層の円山文化層とは直接接しておらず、間には無遺物の大型安山岩の礫層が介在する。

大空坑文化の遺物は陶器が多く、陶器は紅褐色から淡褐色の砂夾陶が主で、混和材は火成岩系が大多数を占め、堆積岩系のものが少数であるが、双方によって製作された陶器の器形は、大きくは変わらない。陶器の器形は口縁が低く小さい罐や鉢が主で、口縁外側には突帯があり、装飾としては画文、拍印縄文、全面赤彩、そして赤色顔料によって描かれた短線状彩絵が見られる。石器としては、打製石斧、打製石鋤、片刃石斧、三角形石鏃、石錘等が見られる。」

(郭 前掲)

大坌坑遺跡の現地は、現在、墓地や田畑、果樹園となっているが、全体としては当時の地形をよくとどめていると思われる。大坌坑文化では、すでに稲作農耕が行われていたことが明らかである。しかし、海に臨む緩斜面という立地からは、付近に大規模な水田を想定することは難しいように見える。このような遺跡立地は、日本でも縄文時代の遺跡などにはよく見られ、狩猟や漁労には都合の良い立地であったと思われる。大坌坑遺跡では、長期にわたる文化の重畳が確認されており、そこに住まった人々がどのような生業に支えられていたのか、興味のある問題である。

大坌坑文化の内容については、多くの文献があるが、筆者が参照できた近年の文献として、郭素秋氏による前掲文献、および臧振華氏による「従考古学看台湾」(臧 2007)があり、以下に要約しておきたい。

大坌坑文化は台湾の新石器時代初頭に位置付けられる文化で、粗縄文陶文化とも呼ばれる。主要な遺跡は台湾北部、南部、澎湖地区に集中し、西北部、中部、東部にも散漫に分布する。大坌坑文化の年代について、一般的には今から6000年前(あるいはもう少し古い)から4500年前前後の間とされ、台南八甲村の貝殻による炭素14較正年代は、 6475 ± 170 BP(測定年代は 5645 ± 60 BP)である。

大坌坑文化の陶器の器形、文様は多様である。円腹丸底罐(短い透かしのある脚台がつくものもある)が主要な器形で、平底器、陶製蓋、双把手鉢、双紐鉢、陶製紡錘車等も見られる。陶罐口部に1~2条あるいは3条の突帯をもつことが特徴である。胴部には縄文があり、口縁部の唇面と肩部には之字形や條形、波浪形の画文が見られる。また彩文も見られる。彩文の色調は紅色あるいは暗褐色で、粗雑な並行線文や、点文などの種類がある。彩文は、主に罐の口縁と脚台の内外あるいは胴部の外器表面上半部(一部には胴部下半部に及ぶものもある)に施され、縄文と併用される。

大坌坑文化の石器には打製石斧、磨製片刃石斧、磨製有段片刃石斧、中央に穿孔のある三角形石鏃と柳葉形石鏃、有槽石棒等が見られるが、種類は多くない。

台湾北部の大坌坑文化に見られる陶器の器形と文様には、やや多様化の現象があるが、台湾南部鳳鼻頭遺跡の大坌坑文化の主要な陶器の器形、装飾と陶器組成は北部のものによく似ている。

近年調査された台南の南関里遺跡と南関里東遺跡の発掘成果は大坌坑文化を考える上で重要である。両遺跡はともに定住的な居住址で、当時既に粳稻、小米の栽培種と犬の飼育が見られる。海産魚類、貝類等の資源も広範に利用されていた。石器では、澎湖群島より搬入されたカンラン石玄武岩を大量に使用して磨製石斧、磨製片刃石斧(長方形と有肩のものがある)、穿孔石刀、石鏃、石鏃、網墜(石錘)、有槽石棒(樹皮布打棒)等が製作されている。陶器は主に赤褐色泥質陶、暗赤褐色夾砂(石英、貝片)陶と灰褐色泥質陶である。陶器の器種には罐、瓶、豆(高杯)と陶蓋があるが、口部に突帯のあるものや透かしのある脚台はほとんど見られない。文様には画文、縄文、彩絵、貝印文等がある。

骨貝器には貝斧、有肩貝刀、貝輪、貝珠、貝製玦などとともに、骨鏃、骨珠、鯊魚の歯牙で作った穿孔飾品がある。特に貝器は豊富で、貝製品の材料は、主に雲母蛤(マドガイ: *Placuna placenta*)で、障泥蛤科(Tree Oyster, *Crenatula picta*)が少量見られる。特に雲母蛤で作られた有肩貝刀は他遺跡には見られないものである。オオベッコウガサ(*Cellana testudinaria*)で製作された貝輪も出土している。

墓葬については、葬具として木棺の使用が始まり、埋葬姿勢は頭位を南に向けた仰臥伸展葬で、埋葬された成年男女にはみな抜歯がある。穿孔された人の歯や石鏃の刺さった人骨も出土している。

南関里、南関里東等の遺跡に見られる器物は、カンラン石玄武岩で製作された有肩石斧、片刃石斧、陶器胎土(貝片を含む)と彩陶の彩文等から見て、澎湖群島の菓葉遺跡に類似し、菓葉類型に属するものである。この類型は、大坌坑文化晩期のひとつの地域的様相で、約4800-4100年前前後に位置づけられる。台南と澎湖両地域の交通は、台湾のその他の大坌坑文化の遺跡との交通に比べてより頻繁であったと考えられる。

大坌坑文化は、長濱文化と年代的に一定の重なりをもつが、文化内容から見ると両者の間につながり

を見出すことはできない。したがって、大空坑文化は長濱文化から発展したのではなく、外来の新たな文化と見られ、福建など大陸側の文化との関連が考えられている。

5. おわりに

台湾は沖縄に隣接する島嶼であるが、両者の環境や文化、歴史には一定の類似性が指摘できると同時に、大きな差異も認められる(盛本 1992、後藤 2008)。

人類の足跡は、台湾でも沖縄においても更新世末期には確実な証拠がある。しかし、その当時の両地域の動物相は大きく異なるものであった。土器の出現は、現在のところ台湾でも沖縄でも約6000年前頃と考えられている。しかし、台湾の土器文化が、中国大陸からの伝播と考えられているのに対して、沖縄の爪形文土器文化は、縄文文化との共通点を多く持っている。一方、先島の下田原式土器文化は、その系譜を縄文文化に求めることは難しいように見えるが、台湾の新石器文化とも一致するわけではない。澎湖を越えて台湾に至った新石器文化の波が、先島にまで到達したのかどうか、今後の検討に待つところは大きい。

参考文献

(和文)

- 小田静夫 1999 「琉球列島旧石器文化の枠組みについて」『人類史研究』vol. 11 人類史研究会 29-46頁
- 小田静夫 2000 「沖縄の剥片石器について」『高宮廣衛先生古稀記念論集』高宮廣衛先生古稀記念論集刊行会 55-77頁
- 小田静夫 2003 「山下町第1洞穴出土の旧石器について」『南島考古』第22号 沖縄考古学会 1-19頁
- 小田静夫 2007 「カダ原洞穴とその調査史-伊江島から始まった沖縄の旧石器文化研究-」『南島考古』第26号 多和田真淳先生生誕百年記念特集号 沖縄考古学会 37-48頁
- 加藤晋平 1996a 「南西諸島における土器以前の石器文化」『月刊地球』Vol. 18 No. 8 511-515頁
- 加藤晋平 1996b 「南西諸島への旧石器文化の拡

- 散」『地学雑誌』105(3) 372-383頁
- 後藤雅彦 2004 「澎湖群島における先史文化研究」『人間科学 琉球大学法文学部人間科学科紀要』第13号 琉球大学法文学部 407-434頁
- 後藤雅彦 2009 「紀元前4千年紀の南中国沿岸における地域間交流」『人間科学 琉球大学法文学部人間科学科紀要』第23号 琉球大学法文学部 113-130頁
- 森 威史 1996 「台湾・卑南遺跡紀行」『博友』第10号 沖縄県立博物館友の会 1-15頁
- 盛本 勲 1992 「南琉球圏と台湾先史時代研究の現状と課題」『文化課紀要』第8号 沖縄県教育庁文化課 85-97頁

(中文)

- 宋 文薰 1980 「由考古学看台湾」『中国的台湾』中央文物供应社 93-220頁
- 郭 素秋 2009 「大空坑遺址考古文化的内涵」『大空坑文化公園評估規劃結案報告書』1-26頁
- 陳 有貝 2004 「小馬龍洞遺址試掘報告」『田野考古』第8卷1、2期合刊 123-140頁
- 黃 士強(盛本勲訳) 1993 「台湾先史文化の紹介」『文化課紀要』第9号 沖縄県教育庁文化課 55-76頁
- 臧振華 2007 「從考古学看台湾」『台湾月刊雙月電子報』96年10月號 台湾省政府
- 鍾 廣吉 1998 「台南県境内新化丘陵区之化石地質景觀及基礎地質調査」菜寮溪化石研究專輯 南瀛文化叢書15 台南県立文化中心40-111頁
- 後藤雅彦(邱鴻霖 訳) 2008 「從沖縄考古學的現狀看與台灣考古學的接點」『考古人類學刊』第68期 國立臺灣大學人類學系 137-148頁

(英文)

- SHIKAMA T., OTSUKA H., TOMIDA Y. 1975 "Fossil Proboscidea from Taiwan (I)" 横浜国立大学理科紀要 第二類 生物学・地学 22、13-35頁
- SHIKAMA T., LING C. C., SHIMODA N., BABA H. 1976 "Discovery of Fossil Homo sapiens from Cho chen in Taiwan" J. Anthropol. Soc. Nippon 84 (2)、31-138頁

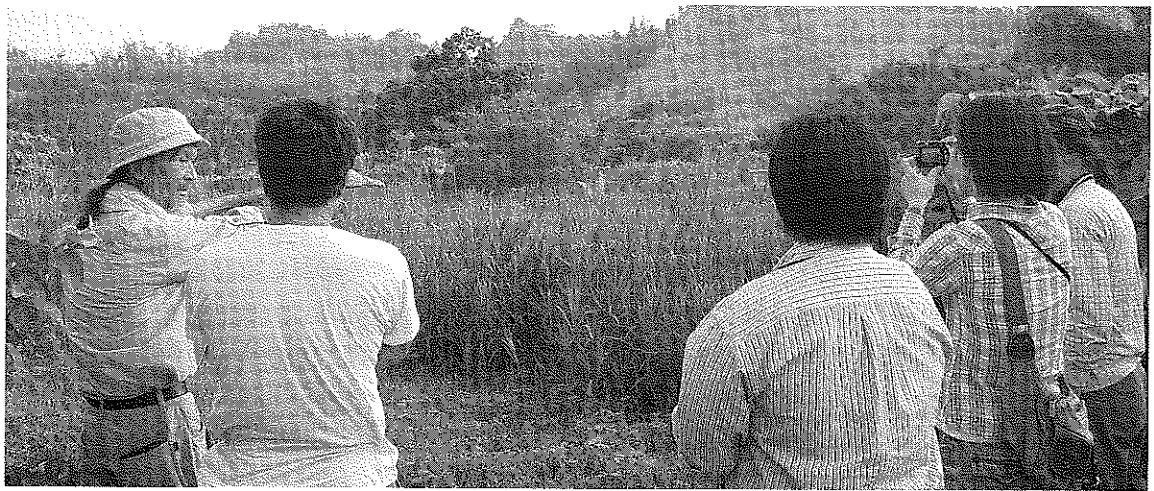


写真1 左鎮郷菜寮溪の化石産出地（臭屈付近）
（左から潘常武氏、朱正宜氏、郭素秋氏、呉美珍氏、劉鵠雄氏）

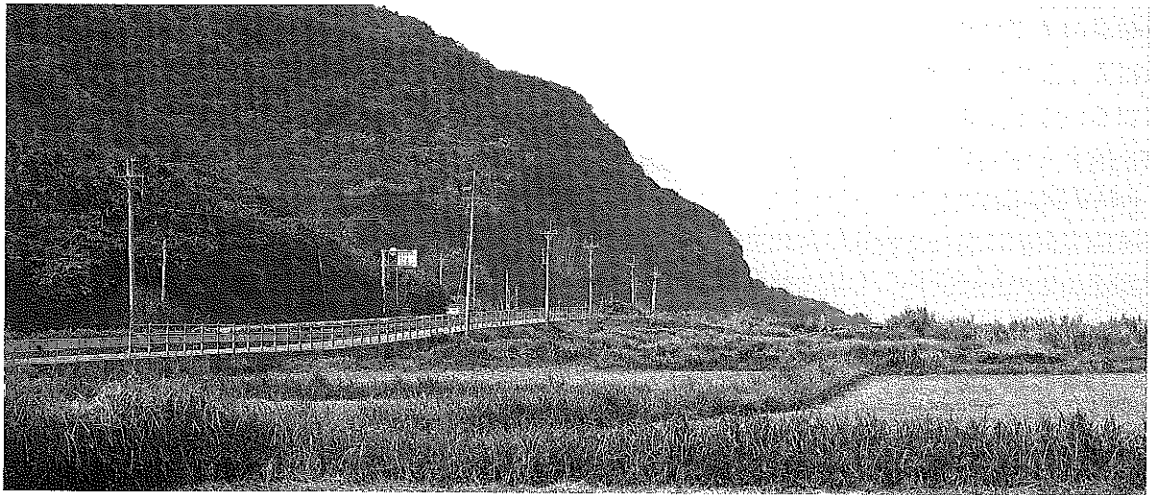


写真2 長濱郷八仙洞遠景（中央の岩壁付近が八仙洞）

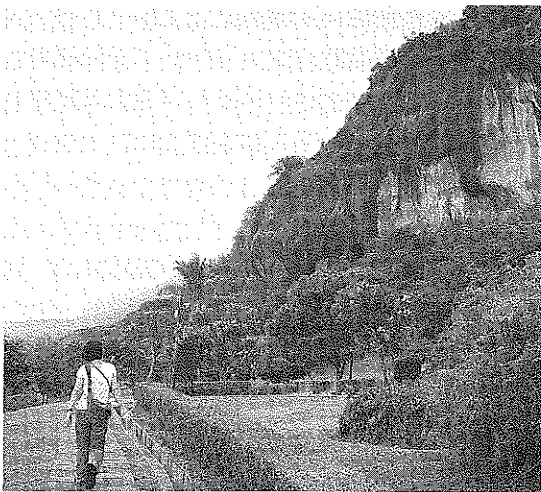


写真3 八仙洞近景
（右手の海食崖に洞穴群がある）

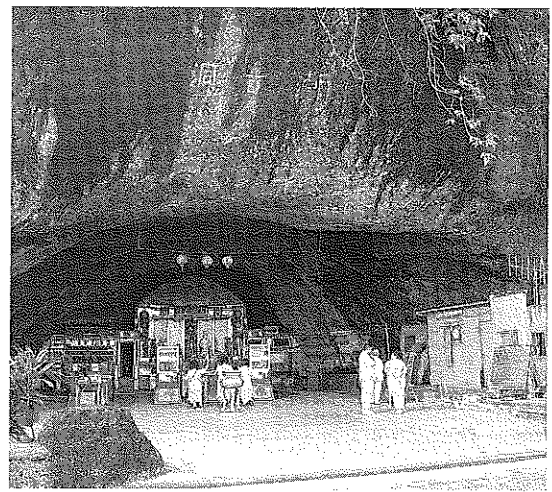


写真4 潮音洞

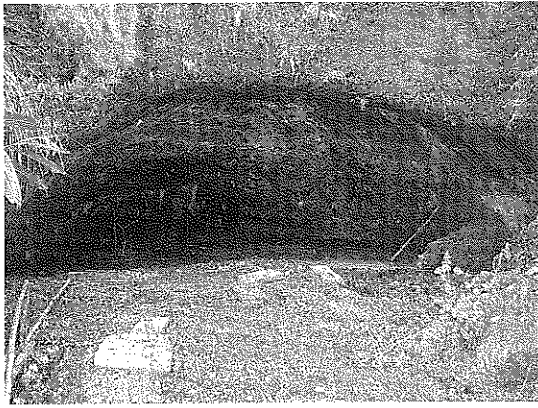


写真5 崑崙洞



写真6 崑崙洞付近からの遠景

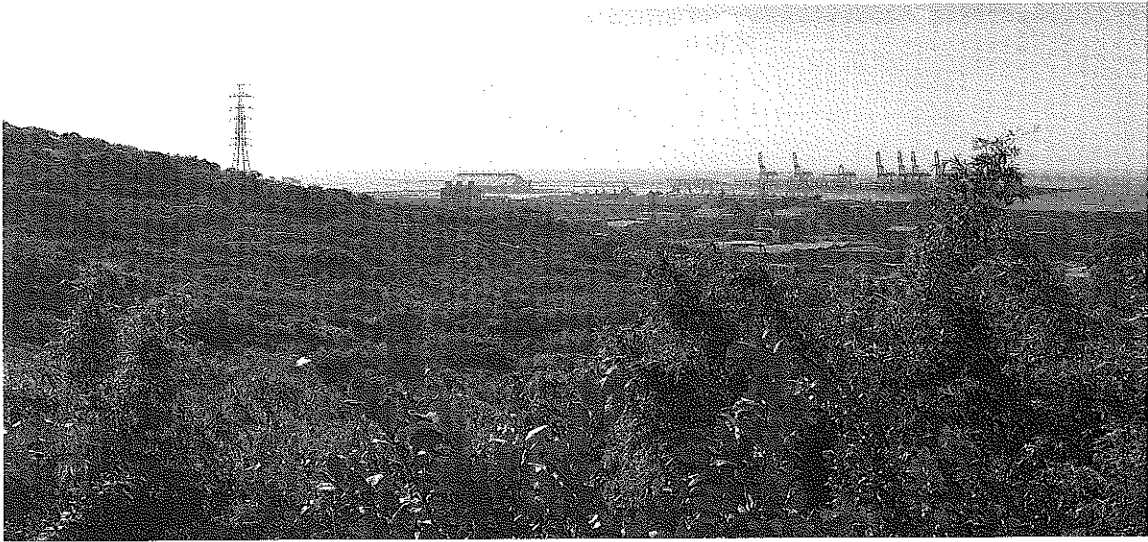


写真7 大空坑遺跡遠景（中央丘陵上の墓地付近が遺跡）

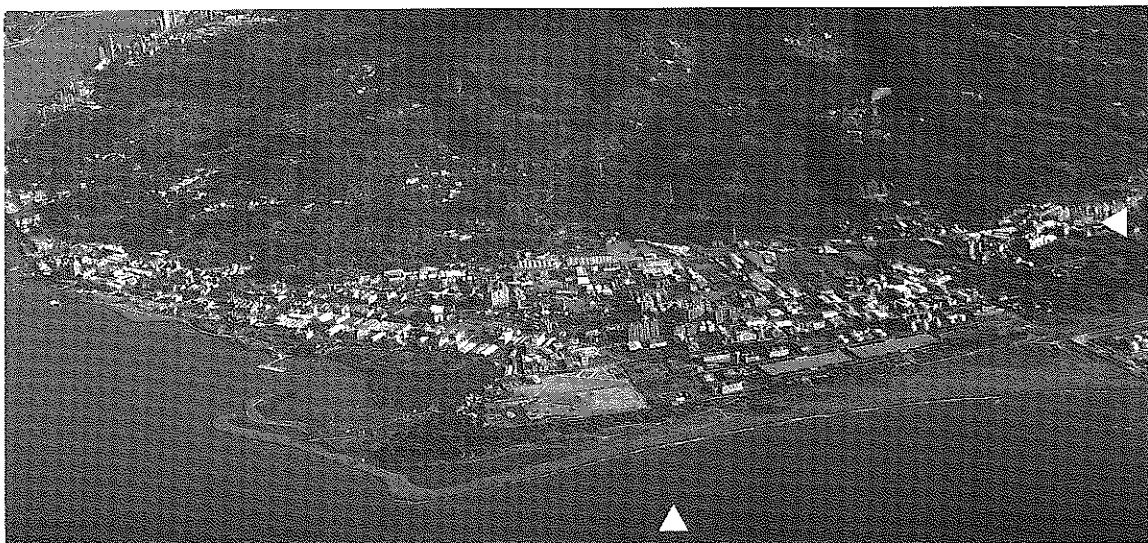


写真8 淡水河口左岸付近を望む（矢印の延長線の交点が大空坑遺跡）

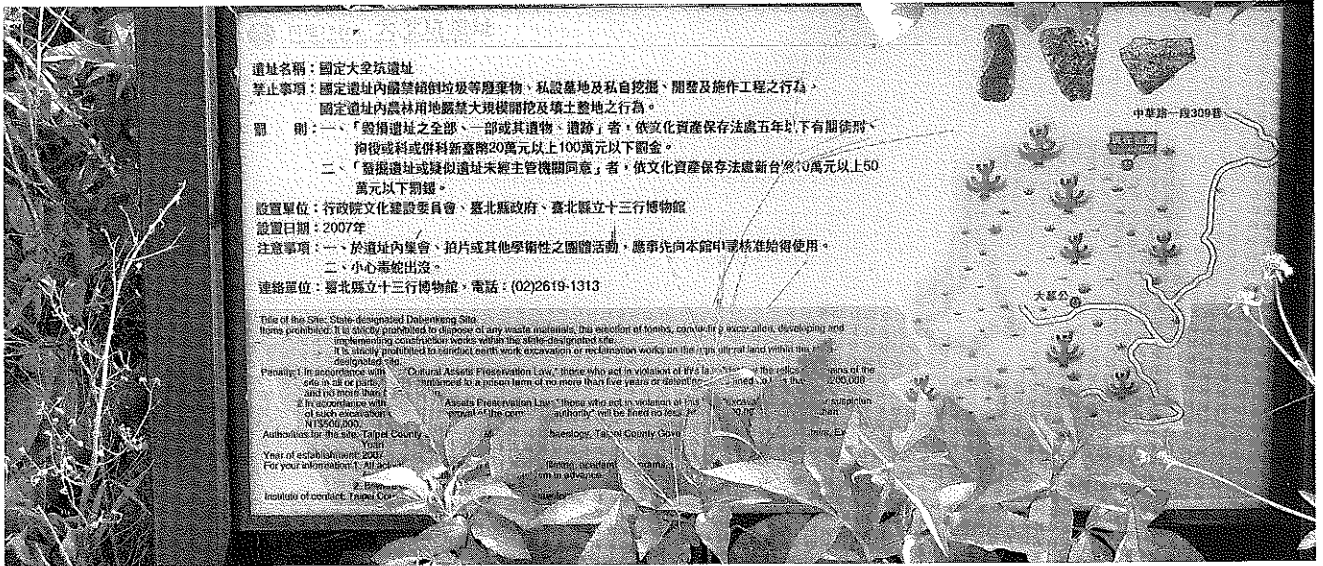


写真9 大空坑遺跡現地の標識
 (遺跡内の開発は禁止されており、違反者には文化資産保存法により罰金・刑罰が科せられる旨の警告が記されている)

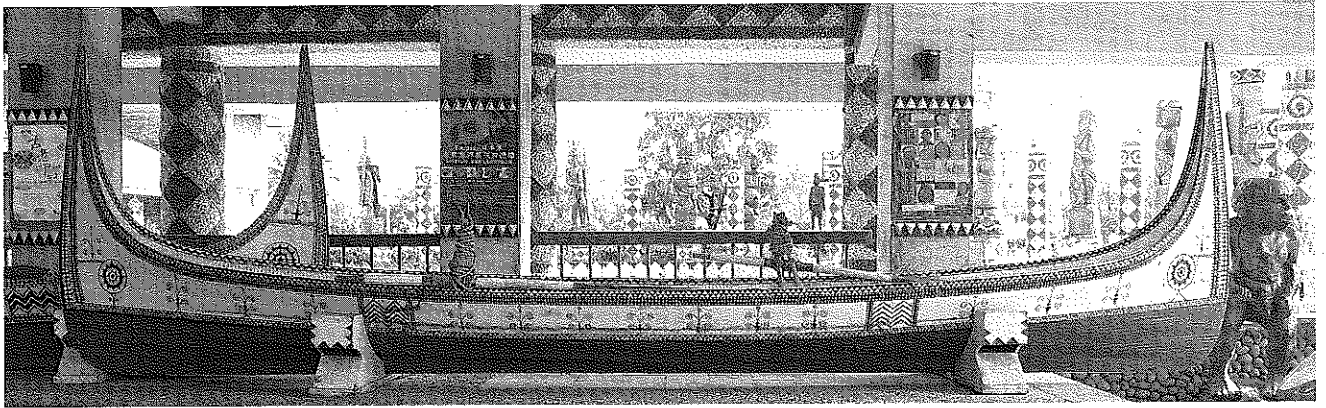


写真10 台湾原住民のカヌー

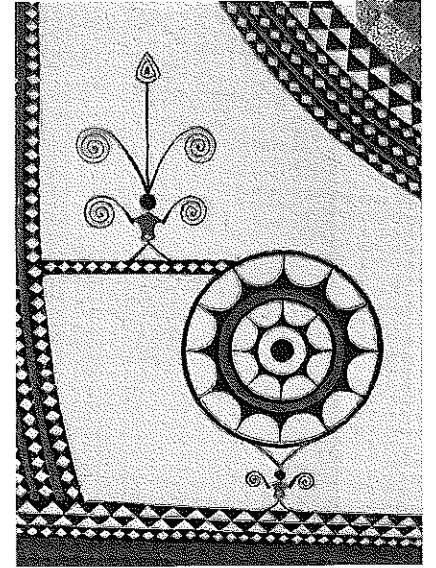
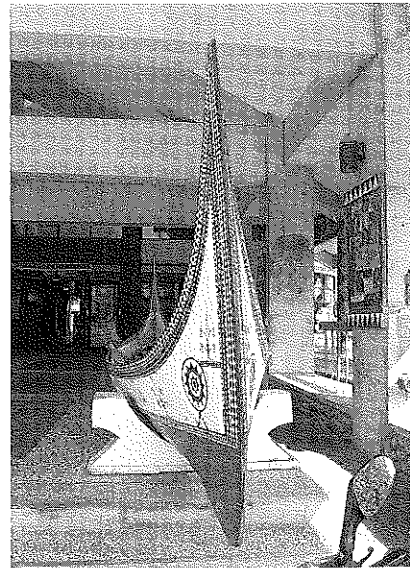
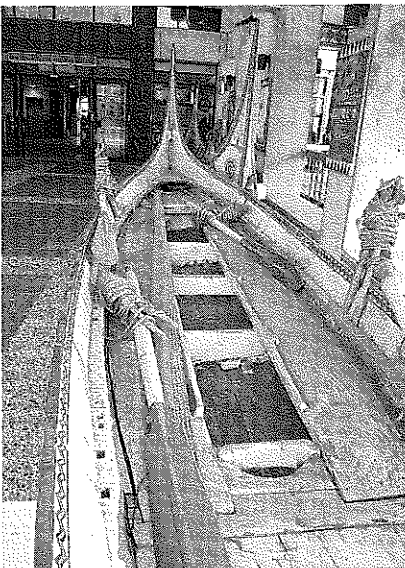


写真11 カヌー細部